

さか、二年前アリューションで戦死したとは思って
いなかった。戦友はバラバラに帰っているので戦友会
もなく戦友とも会えない。

パゴダ（仏塔） 国ビルマにおいて戦場となり玉砕に
つぐ玉砕で死闘をつづけ、夥しい数の兵士の英霊に安
らかにと合掌します。

ビルマは四月中旬から十月中旬まで、ちょうど雨期
であります。常夏の国ですが、夜中になると雨が降っ
ているのかと思われるほど露が下り温度が下がります。
兵舎の屋根は椰子の葉を重ね合わせて造っているので
露の降る音が高い。

農業国であるビルマの諸民族の多くは仏教信者で、
性格は朗らかでビルマ人は転進中、乞食同然の兵士た
ちを迎えてくれ、彼らには幾度か命拾いさせてもらい
ました。

南ビルマ従軍回顧

宮城県 尾形 喜七

私は昭和十九年六月十五日、仙台市東部第二十二部
隊（第二師団歩兵第四連隊留守部隊）へ入隊しました。
臨時召集です。当時、大東亜戦争も戦局が劣勢で緊迫
し、日本内地にも民間の対空監視哨が設置され、私は
視力が左右とも二・〇とよく見えたので、監視哨の副
哨長であった関係上、召集延期であったように思われ
ます。

応召時の私の家族は、

父	健在	農業
母	〃	〃
本人	〃	二十九歳
妻	〃	二十七歳
子一人	〃	一歳
兄	〃	〃

にかけて、増田の飛行場の退避壕構築作業に出動、閉上小学校に合宿、炎天下、砂囊を作り、積み上げ作業で汗を流した。また行きも帰りも棒杭に砂囊を縛りつけ、重機関銃にしつらえての演習も加わり、とにかくしぼられ放しでした。

そのころ地元の閉上婦人会の慰問があり、ナベ、カマ、サラなどの楽器の賑やかな演奏も忘れられない。作業はきつかったが、仙台の兵舎とは異なり、比較的開放的な気分であった。

面会も盛んで同郷岩ヶ崎の高彦さん、菅原忠逸さんの若夫人、そして私の母、妻と子らが連れ立って軽便、本線を乗り継いで、片道三時間半かけ面会に来てくれたこと再々です。

こんなこともありました。私たち野戦へ出征する直前のこと。その日も例により、上ばき靴で思いきりハタカレた。顔がはれて歯がグラグラしてた。そこへ面会が衛門へ来ているとのこと。急いで駆けつける。電柱の上にはの暗い電灯がついている。私の顔を見て、「よく肥えてきたの」だなんて。夜間のことで肥え

ているのか、腫れているのか暗くて分からないのだ。この面会はこの世の最良の楽園であった。いいとこの家督息子さんは早く結婚している。新婚ホヤホヤの新兵もいた。

九月、面会人が来ているとの知らせで行ってみると母だ。嬉しいやら困ったやら、奥山見習士官に事情を話すと「俺が責任持つから中隊長室で面会せい」と、有り難かった。夏の盛りで食中毒の注意もあり面会禁止が常であった。母が言うには「将校さんに見つかり直感的に息子が罰せられるのではと身の縮む思いをした」とか。同隊の庄司さんの奥さんも同じで、子供二人を連れての面会だった。後での話だが、次男が中隊長室に展示してある飛行機の模型を欲しがり、ダダをこねたとか。

十月初め、二泊三日の外泊許可。いよいよ南方への出発が確定。中旬ごろ新品の軍服、鉄兜、防毒マスク、防蚊手袋と覆面、籐たつるの弁当箱が支給され緊張が高まる。

十月二十五日、二百七十五名の補充兵はビルマ派遣

森第一五八一六部隊要員となり、真夜中の十二時、肅々として仙台駅へ向かう。駅へ近づくにつれ、見送りの親兄弟妻子がぎっしりと沿道を埋め尽くす。印象に残るのは、提灯の明かりに浮かぶ「行方」、我が分隊員の妻子であった。ほの暗い灯に浮かぶ着物姿、小学生になった子供たち、その姿が今も目に残る（行方戦友はサイゴン上陸後胃腸をこわし、バンコクで入院、その後快方に向かいタボイで追跡したが、武運拙く病死）。

仙台駅に着くと、隊員はそれぞれの親、妻子が興奮して待っている。あん餅、いり豆、赤穂などを受け取り、最後に水筒に酒を入れ、交わす言葉もそこそこに「元気でな」「留守を頼む」二言三言。慌ただしい別れだ。

この時の私の家では、兄一人は中支へ（昭和十九年九月戦死、私は復員後知る）、もう一人の兄は朝鮮羅南へ（後にトラック島）、今度は三男の私が南方へ出征ということ、両親の胸中いかばかりであったか。

それぞれに慌ただしく別れた夜景が目には浮かぶ。いよいよ出発の汽笛が鳴り響き、列車の中は一応落ち着

き始める。緊張と不安を消そうと酒を飲み交わすが、なかなか眠れなかった。

十月三十日門司着。三々四人ずつ民家に分宿。素晴らしい待遇を受けた組もあったとか。

昭和十九年十一月三日門司港出航。その当時の戦局を見ると既に、ビルマ軍のインパール作戦は失敗、総くずれとなり、悪名高い悲劇の死闘のあと、北部ビルマの放棄と南部ビルマの確保を大本営より下命された。フィリピンでは世界に例を見ない特攻隊の一番隊として、海軍の関大尉以下五名の若者が米艦に体当たり自爆した。ニューギニアの戦線も玉砕、サイパン島、グアム島も敵の手中に帰した。敗戦の様相は色濃く、大勢は絶望的であった。勿論、海も空も敵米軍に制圧されて、日本軍は動きがとれない状態に落ち込んでいた。このような悲劇的条件の中で、十一月三日夕刻乗船し、「皇居遙拝、万歳三唱」そして「暁に祈る」を歌い、心を鎮め、何度目かのいよいよを痛感した。

記憶は定かではないが、二十七隻の大船団で七隻の駆逐艦に護衛され、正に威風堂々たるものでした。我々

の船はシンガポールへの予定であったが、敵の潜水艦及び空爆の予防上サイゴン上陸と変更された。船倉は狭い蚕棚に仕切られ、水はきびしい節水。ベークライトの食器の匂い。船酔いに苦しみながら一時間交代の対空対潜監視の任務についた。私は応召前の実績により「お前は監視のベテランだから、他の者をよくまとめてしっかりやれ」と嚴重なお達しがありました。

そのうち、私の乗船はコンパスの不調により、輸送船の船列より離脱して独航状態となり、全員心細くヤキモキと心配、無事上陸できるのかと小パニックの状態でした。

我が分隊の監視は船首の位置で、荒れ狂う南支那海では、怒濤の波をかぶることも再三であった。私が空、小野戦友が海、積乱雲の中から敵機が出てこないようにと祈りつつ、空を見上げてヘドを吐き吐き任務に励んだ。カムロ湾にさしかかるころ、背の高い八の字髭の新潟の大尉さんが「もし空襲があると、撃沈される。嚴重に見張れ」と警告された。我が分隊に強者がいた。寺沢戦友は「俺は絶対に死なないからついてこい」と

の一言で随分心強く思ったものだ。寺沢戦友は支那事変では船ごと徴用され活躍した経験の持ち主で、船酔いして食べられない兵の分までもりもり食べていた。いつ海に投げ出されても体力をつけておかなければと、感心させられた。

もう一つ出来事があった。先に述べたように我々の乗船は、船列から離れて、ジグザグコースを進む。途中、水平線の彼方に煙を発見した。「三時の方向に煙発見」と叫びつつ、本部へ急いで連絡をしました。幸いにも友軍の船列で事なきを得ました。本部には二〇倍の双眼鏡二個を備えているのにもかかわらず、私が肉眼で最初に発見したので、隊長は喜んでくれて「尾形よろしい」と褒めてくれたことも懐かしい思い出があります。

次に海上で恐ろしかったことは、サイゴンの港外で夜の十二時ごろ、二十七隻目の輸送船が敵潜水艦の浮上による魚雷攻撃により轟沈させられた時のことです。「それ、敵潜の魚雷だ」で大騒ぎとなり、浮上している敵潜目指して七隻の友軍駆逐艦より砲撃、各輸送船

のそれぞれの火器からの攻撃が始まりました。弾丸の中には曳光弾が交じっていて、まるで盛大な花火大会のごとき美しさを感じました。が、反面各船とも船内の恐怖はますます高まり、ついには命令をきかずと船を接岸して我先にと命からがら上陸する状態となり、私もどうにかやっとのことで上陸できて、ヤレヤレと一安心したことでした。それは十一月十六日のことでした。しかし残念なことには沈んだ船の乗員は大多数が沈む船の渦巻きに巻き込まれて無念の水没をしたことでしよう。祈る御冥福。

とにかく、サイゴンに上陸した。埠頭には炎天下裸で半ズボンに食器、水筒を腰にぶら下げた、でっかい日焼けした英軍の捕虜が汗を流しながら荷揚げしていた。南国も初めてだが、捕虜を見るのも初めてであった。

船酔いの後遺症もあって、フラフラしながらも上陸。何よりも水が飲める。一杯の水の味は忘れられない。バナナ、パイナップル、マンゴ、ドリアン。加えて飲

んだこともないアイスコーヒー。南国とは天国。珍しさも手伝って胃袋の大きさ、弱さも忘れて飲みかつ食い、ついには腹をこわして下痢する者続出。

サイゴンには七日間駐留し、十一月二十二日発動汽船に乗りブノンペンへと出発した。メコン河の川幅の広いこと。上流から数百羽のアヒルを操り行く船、遠くに椰子の茂る河畔、小さく見える民家、南国南方とはこんな所かと長旅の疲れをいやすのんびりした風景であった。

ブノンペンには二日駐留。上官からは性病には特に注意せよとの指示がきつかった。この地区の娘たちは身を売ってまでも、女学校に通うという向学心の強い所とのこと。これも永い間のフランスの植民地政策の貧困がもたらした一つの例と考えられた。やがて下痢を気にしながら有蓋貨車でバンコクへ向かった。

昭和十九年十一月二十八日バンコク（タイ国首都）到着。次の出発が十二月二十三日だから約二十五日間の長い駐留で、毎日敵の空襲の連続であった。このころ、ビルマ戦線は、インパール戦線をはじめ、各地で

苦戦敗走中で、我々はビルマへ出発するか、ここにとどまるかどうするかと、上層部が迷っていたための長駐留となったと聞いた。ここでも毎日いやな空襲に悩まされた。

バンコクからビルマのタンビザヤへ。十二月二十三日バンコクを出発、ノンブラドックから泰緬鉄道に乗り換え、タンビザヤに向け出発。爆撃の危険をさけるため、日中は引込線に入り、竹を切ってきては偽装隠蔽、夜間運行というモグラ輸送であった。ある駅では比島のレイテ大勝利との話を聞いたが、次の駅では否定的でがっかりした。

貨車は十二月二十九日タンビザヤ着。ここでは同郷の阿部さんとの出会い、食べ切れないほどの大福餅を恵んでくれた。内地の情報、ビルマの戦況など語り合った。ここから北は激戦地、南は防衛陣地。お互いに元気で頑張ろうと励まし合い別れた。

さて、ビルマまで来たとは言え、ただもう軍旗を追及し移動したのみ。十二月三十日朝、トラック輸送でタンビザヤを出発、夕方目的地タポイ到着。部隊長に

対する到着申告後編成替えあり。各中隊に配属。部隊名、独立歩兵第六七一大隊、部隊長は美並少佐。(テナセリム地区防衛隊。原隊は長野県松本第五十連隊)

私はこの編成替えて、一般中隊より機関銃中隊へ移り第一弾薬手となる。三日後に検閲があり、部隊長より「射手四番戦死、第一弾薬手四番に交代。射手」といわれて、匍匐し、三連射すると陣地変換と無事大役を果たして、検閲も何とか合格し幹部にほめられました。

機関銃中隊には馬がいる。厩当番、指揮班へ、事務所当番、准尉さんの当番、中隊長の伝令、被服係と業務は変わり、階級も兵長に進み、伍長に任官しました。軍隊では上等兵は神様扱いですから、その上の兵長、伍長となればお分かりでしょう。

中隊の宿舎は元のタポイ女学校とかで、北緬作戦の戦死者、本郷隊長をはじめ多数の遺骨箱が祭壇に並べられ、銃を逆さに遺骨衛兵が立哨していたのには、身の引き締まる思いであった。北緬作戦、九号討伐など、部隊主力六百人のうち戦死三三二人、生死不明六〇人、

負傷者多数とのこと。調所部隊長戦死、弔い合戦の山本部隊長も戦死されたと聞く。

資料によれば、主な戦闘は十九年の「モール戦闘」「タイヤゴンの戦闘」で、主力の生存者は十一月ごろ原隊に帰還したとある。我々補充兵の到着が十二月三十日だから、約一カ月前に帰隊したばかりであったと知る。

私たちはテナセリウム地区防衛作戦参加です。テナセリウム地区とはビルマの最南部で、印度洋に面したマレー半島の北部にある。すぐ西方の洋上にはアンダマン諸島、ニコバル諸島が位置しており、これらの島々には敵が既に陣地を構築、反攻の足場としていたので、日本軍も対抗上タポイ、トナダンより南方の臨海地区に陣地を築きました。戦死（敵の空襲による被弾）、病死（マラリア、下痢、栄養失調、餓死等）する戦友も次々と出て、私もいつ倒れるかと暗い気持ちでした。私らはタポイ到着の翌日、十二月三十一日の大晦日の夜、我々補充兵の歓迎会の真っ最中、突如非常呼集がかかり、白田曹長を長とする一個分隊が慌ただしく、

重機関銃をトラックに搭載、渡河点を通過し、モンマガンに急行した。当地は大二中隊及び銃砲隊高野大尉が警備中で、早速配備についた。到着した所は遠浅の続くカニの遊ぶ砂浜であった。いわゆる水際殲滅作戦の第一線であった。いよいよ戦闘かと銃の手入れ、陣地配置の概要など下達された。

三日後の昼ごろ、水平線にかすかに雲か艦か、判断出来ぬ影が現れ、大騒ぎの末、雲と分かり、皆顔を見合わせて安心した。

伊藤伍長は「いつ来襲するか分からない。持ち物の整理をしておけ」と注意していた。彼は北緬作戦の勇士で、戦闘の悲惨さ、倒れていった戦友を顧みての言であったろう。

白田分隊長以下はそれから十日くらいでタポイに復帰した。なお、モンマガン、ランロン地区はその後八月十五日の終戦まで、非常に緊迫した情勢下にあった。戦後の英軍資料によれば、昭和二十年五月、モンマガン上陸予定と記されていた。戦時中の上陸はなく、戦後の一カ月後モンマガンに英印軍が戦闘態勢で上陸

した。

昭和二十年八月十五日終戦、数えれば入隊以後一年三カ月であった。この間タポイには到着から九カ月の勤務で、主として日夜陣地構築に汗を流した泥臭い異国の青春であった。

思い起こせば、テナセリウム地区防衛は日に日に緊迫度を増し、金剛山をはじめとする各隊は陣地構築、敵戦車攻撃対策におおわらわであった。そして昭和二十年八月十五日の「堪えがたきを堪え……」の放送、終戦となり、戦いはその終わりを告げ、悔し涙で矛をおさめた。

明治以来の富国強兵、軍国時代の幕は下ろされた。その後およそ二年間、転々として苦役の抑留生活が始まった。タポイ↓イエムドン↓モールメン↓ラングーンとようやく昭和二十二年七月乗船、帰還した。この間の思いは故郷であり、家族妻子の安否で、帰還を待ちこがれたものであった。

終戦後間もなく、北上してモールメン地区へ移動。

ここで南方従軍中、もっとも忌まわしい残酷なことがありました。戦争犯罪人として指名された将校は、無実の訴えも許されず、ラングーンに送られて無残にも戦犯として、また敗戦の責めを否応無しに、自分の一つしかない尊い生命と引換えに処刑されたことであります。本人はもとより遺家族の嘆き、憤りはいかにばかりかと思ひ、幸いにも生還を無事果たした者の心に、拭い切れない負い目を深く刻み込まれたことです。

私は、戦犯容疑者としてラングーンに連行され、強制収容されたが、民衆や当局の首実験Ⅱ面通しに、幸いにも(当然無実であり、身代わりを免れただけのこと)容疑が晴れて、無事日本内地へ生還できました。戦地での病気といえ、マラリアの三日熱にやられました。幸いにも大事に至らず、今日まで元気に長生きできました。

日本軍が終戦後、戦犯として収容、処刑されたいろいろの原因の中、最も問題とするものは、例の泰緬鉄道建設の犠牲に対する報復であるとも伝えられている。左に当該鉄道建設に伴うデータの一部を記して参

考とする。

泰緬鉄道

着 工 昭和十七年七月ころ

完 成 昭和十八年十月

約一年三カ月の突貫難工事であった。

タイ側から鉄道第九連隊

ビルマ側から鉄道第五連隊

双方で 一万五千人

現地労務者 約十万人

捕 虜 約五万人

悪疫の流行によりマラリア、コレラなどで犠牲になっ

た人数

日本兵 約千人

現地労務者 約四万人

捕 虜 約二万人

タイ国内「ノンフラドック」より、ビルマ国内「タンビザヤ」まで

この犠牲者の数は、鉄道の枕木三本に一人の割になるといふ。その数に匹敵する数の戦犯者を、身代わり

か本人かを問わず、数合わせのみ考えての、収容拘留であつたともいわれる。